

## 雷獣考

吉岡郁夫<sup>※</sup>

### はじめに

雷の正体がわからなかった時代には、雷は雷神の仕業として恐れられ、それには雷獣や雷鳥も関わっていると信じられてきた。雷の本体が電気とわかってからも、日本では戦前の昭和の時代には、まだカミナリサマと敬称をつけて呼ばれることがまれではなかった。

その当時まで、雲の上で連鼓を背負い、虎の皮の褌をしめた鬼のような姿が、一般の雷神像として定着していた感があった。このような雷神が描かれるようになったのは、平安時代にまで遡り（中山1921 p.29）、江戸時代には俵屋宗達（? - 1640）の絵や三十三間堂の彫刻がよく知られている。このような雷神像は敦煌の壁画にも見られるそうだから、6世紀の中国まで遡ることができる。

雷神と共に、雷に関係のある雷獣の存在も広く信じられてきた。雷獣も中国では『山海経』をはじめ、多くの文献<sup>1)</sup>があるので、これも中国伝来の思想という点では、研究者の意見が一致している。

日本に雷獣が文献に表れるのは、雷神よりもずっと新しく、元禄（1688-1703）以降に多くなる。これは江戸初期に移入された『本草綱目』の影響が大きいと考えられる<sup>2)</sup>。おそらく落雷に驚いて、野獣が樹上から駆け降りたり、叢からとびだしたり、あるいは雷に打たれて死んだりしたのを、雷と共に落ちたものと見誤ったのだろうといわれている。

これらの野獣は明治以降の研究者によって現生動物に比定され、最近では動物の研究者も加って論じられている。ここでは、私の知る範囲でこれらの雷獣について考察してみたい。

### 雷獣の分布

江戸時代以降の雷獣の文献や記録を集めてみると、当初の予想をはるかに上回り、北海道と九州を除く、本州のほぼ全域と四国の一部に及んでいる（表1）。

この表を見る限り、雷獣は関東から本州中央部に多いということが出来るかも知れない。

だが、「雷獣」と呼ばれた動物の絵は、荒唐無稽なものを除外しても、後述するように複数の種からなるものと考えられている。

---

※日本民俗学会会員

表 1 雷獣の記録された地方

都府県	地名	文献
岩手	陸中和賀郡江釣子村（北上市）	東京日日新聞 昭和10（角田1943）
秋田	出羽 秋田	古史伝，甲子夜話
福島	岩代 会津 磐城 相馬	湯本（2005） 執苑日涉
栃木	下野 日光 烏山	随意録 北窓瑣段
埼玉	武蔵 埼玉郡岩槻領掛村 （岩槻市→さいたま市）	栗本丹洲動物写生図（荒俣1988）
東京	武蔵 鳥越袋町 江戸	甲子夜話 重訂本草綱目啓蒙
神奈川	相模 大山（雨峰山）	震雷記，和訓栞 湯本（2005）
千葉	安房 二山（二村山）	鋸屑譚，笈埃隨筆
新潟	越後 魚沼郡伊勢平治村 三島郡西生寺（ミイラ） 三国嶺（峠）（鹿瀬町→阿賀町） 村松域 飯豊山	玄同放言 湯本（2005） 越後名寄 〃 〃
長野	信濃 山科山	信濃奇勝録，和訓栞
山梨	甲斐 天目山（大和村→甲州市）	類聚名物考
静岡	駿河 益頭郡花沢村 高草山 不二山七郡	駿国雜誌 〃
愛知	尾張 知多郡 名古屋（見世物）	和訓栞 塩尻
滋賀	近江 竹生島（長浜市）	湯本（2005）
大阪	河内 （山中）	越後名寄
奈良	大和 桜井村（桜井市）（→大阪で見世物）	撰陽奇観
兵庫	播磨 赤穂城下（赤穂市）	湯本（2005）
和歌山	紀伊 高野山奥 日高郡 牟婁郡	紀伊風土記 〃 〃
鳥取	伯耆	随意録
島根	出雲	〃
岡山	備前 備中	重訂本草綱目啓蒙 〃
広島	安芸 五日市（広島市） 九日市？	湯本（2005） あづまかひ，閑田次筆，奇怪集
山口	周防 長門 豊浦郡上岡枝村 （菊川町→下関市）	毛利梅園の記録（磯野・内田 1992） 郵便報知新聞 明治12（湯本1991）
徳島	阿波 由来喜来（美波町）	笈埃隨筆
高知	土佐	重訂本草綱目啓蒙

これまで多くの研究者によって説かれてきたように、落雷の際に眼に触れた動物を誤称したとすると、雷獣の記録は雷の多発地帯に多いのではないかと、という考えが頭をよぎる。

雷は全国どこにでも発生するが、雷獣の分布は最近の気象学的データと必ずしも一致しない。1970年代の年間の平均雷雨日数は石川・富山県境付近と宮崎県えびの高原の40日が最も多く、関東北部、新潟・福井・岐阜県の山間部、愛知県三河高原、鈴鹿山脈（三重・滋賀県）、滋賀県琵琶湖北部、大分県日田地方の35日がこれに次いで多い<sup>3)</sup>。

ところが、最近のデータを見ると、雷雨日数の年間平均が35日以上の観測地点は、金沢（石川県）、酒田（山形県）、高田（新潟県）、30日以上は福井、新潟、敦賀（福井県）といずれも日本海沿岸にあり、太平洋岸や西日本の多発地点は20余日となっている<sup>4)</sup>。太平洋側に住んでいる人々には、雷は夏のものが多いという思いこみが強いが、日本海側には冬の雷が多い。

落雷の場所には必ずしも野獣がいたとは限らないし、また落雷の理由を雷獣以外と考える地域もあって、すべてが雷獣の仕業とは信じられていなかったのではないだろうか<sup>5)</sup>。つまり、雷獣伝承のある地域は各地にあったが、その分布はまだら模様ではなかったかと想像する。雷獣は見世物になるほど珍しい動物であったという見方もできる。しよせん、好奇心から記録された文献と、観測によって積み重ねたデータとを比較するというのは無理なことであった。

## 雷獣の生態

雷の正体が電気であるという知識が普及した明治以降でも、まだ雷神信仰の名残があり、各地の天神神社は雷除けになると信じられてきた。また、雷鳴が聞こえるようになると、仏壇の線香に火をつけたり、蚊帳を吊って子供たちをその中に入れたり、臍を出している子供に、雷様に臍を取られるとたしなめたりしたことは、民俗学的にはよく知られている。

しかし、太平洋戦争以後、雷神の伝承はしだいに忘れられ、雷獣になると、すでに知らない人の方がはるかに多くなっている。

雷神と雷獣との関係は甚だ曖昧である。雷神＝雷獣とする考え方、雷獣を雷神の使令とする説、中山（1921 p.26）のように両者の中間とする説（雷獣を雷神の眷族とする）などがある。

雷雨や落雷のときの雷獣の行動を、もう少し具体的にいうと、雷神といっしょに雲中であって、太鼓を叩く手伝いをするという人、雷神は天に、雷獣は地上にあり、雷が鳴るときにだけでかけるという説があり、落雷時には火焰に包まれて落ちるものといわれている（中山1921 p.28）。そして、落ちた場所には、火気ばかりでなく脱毛や爪痕がある、と雷獣の存在を説いている（『三才窺管』）。

『北窓瑣談』には、下野（栃木県）烏山の付近では、「夕立の雲興り来る時、其雲にも獣の乗るべき雲と乗りがたき雲有るを、雷獣能見わけて、乗るべき雲来れば、忽ち雲中に飛入て去る」が、雲に乗ると必ず雷鳴があるというのではなく、ただ雷になるとのみいい伝えている、と記している。

雷獣は常に山に棲んでいる（『駿国雑誌』『紀伊国続風土記』『越後名寄』）。晴天の日はおとな

しくしているが、雷鳴、雷雨になると勢いが強くなる。

夏、雷雨が起こる前、岩上に立って蝨（いなご）のように速やかに雲の中に飛びこむ（『倭訓栞』『信濃奇勝録』）。また、穴から首を出して雲を待ち、それに乗って去る（『北窓瑣談』）。雲が下がって山中を俺うと、それに乗って雲中を駆けまわり、雷と共に地上に落ちるといふ（『震雷記』『越後名寄』『扶桑雷除考』）。

秋になると、雷獣は地下に入り（『執苑日涉』）、冬にも穴に入るのて、雷獣を千年<sup>いたち</sup>鼯といふ（『信濃奇勝録』）。下総（千葉県）には雷洞といつて、雷獣の常に出入りする所があるといふ（『松屋筆記』）。

奥州相馬地方（福島県）では<sup>かみなりかみ</sup>驅雷と称して、秋山に入り雷獣を掘り出して捕える。これを多く獲ると明年は雷が少ない（『執苑日涉』）。下野（栃木県）では毎年雷狩といつて山に入り、土を掘ると底から煙のようなものが出るといつている（『笈埃随筆』）。房州（千葉県）二山<sup>6</sup>といふ所では、正月、二月ごろ村人が雷獵といつて、山中をかり出して獲る。これをしないと、その年の夏秋は雷が多いといふ伝えるとある（『鋸屑譚』）。土佐（高知県）の雷狩は海岸で行われ、雷獣が巖頭にいるところを打ち殺す（『南総珍』）。捕らえた雷獣を食べるといふ文献は多い（後述）。

#### ハクビシン説の登場

これまで雷獣のモデルと考えられてきた動物はいくつもあるが、「雷獣」と呼ばれていたものは一種類ではなく、複数の種が含まれているといふ研究者が多い。これらの動物は次のようにまとめることができる（表2・3）。

表2 雷獣とされた動物（江戸時代）

小狗（こいぬ）	和訓栞，屠龍工随筆，信濃奇勝録
小狗，雛狐（こぎつね）	震雷記，玄同放言
払林狗（ふつりんく，ちん）	甲子夜話（巻八）重訂本草綱目啓蒙（備前，備中，土佐）
狼（雷獣図）	玄同放言（越後）
猫	甲子夜話（巻二）
小猫	和漢三才図会
小狗，獺（おそ），猫	越後名寄
狸（虚実は知らず）	閑田次筆（あづまかひより）
貂（てん）	あづまかひ
鼯（いたち）	駿国雑誌
貉（むじな），鼯（むささび）	類聚名物考
鼯（いたち）	重訂本草綱目啓蒙（大和）
鼠（ねずみ，鼯より大）	北窓瑣談

表3 雷獣とされた動物（明治以降）

似ている動物	推定	発表者	推定の根拠
ネコ	不詳	(湯本2005)	郵便報知新聞 1907
不詳	雷嵐の一種	渡瀬庄三郎 (中山 1921)	中山との談話
テン, イタチ, アナグマ	イタチ科	日野 1926	各文献
リス, ムササビ	リス科	〃 〃	〃
テン, アナグマ	テン, アナグマ	角田 1933 〃 1943	各文献 〃
ハクビシン	ハクビシン	高島 1956	東北地方の業者
ハクビシン	ハクビシン	小原 1964 〃 1970	類聚名物考, 震雷記 〃 〃
テン	テン	岡田 1979	越後名寄, 玄同放言, 甲子夜話
テン	テン	荒俣 1988 〃 1994	玄同放言, 甲子夜話 〃 〃
ハクビシン	ハクビシン	梶島 1997	類聚名物考, 震雷記, 塩尻

ジャコウネコ科	ハクビシン
イタチ科	イタチ, テン, アナグマ, カワウソ
リス科	リス, ムササビ
イヌ科	イヌ, オオカミ
異形の四足獣（架空の動物）	

次にこれらの説を検討してみよう。雷獣のなかには、ハクビシンが含まれるという説は、動物学者によって唱えられている。私が最初にこの説に接したのは、小原（1964・1972）の著書のうちの後者である。従って、ハクビシン説は先にあげた諸説のうちでは最も新しく登場したものであるが、これを最初に取り上げたのは、江戸時代の文献にハクビシンを描いたと思われる絵があり、民俗学の領域ではまだなじみが薄いと考えたからである。

日本ではハクビシンが注目されるようになったのは、昭和27年（1952）の日本哺乳動物学会の例会で、宇田川龍男（当時農林省鳥獣研究室長）が山梨県や静岡県でハクビシンが捕獲されたことを報告してからである。（小原1962・1972）<sup>7)</sup>。それ以来、日本のハクビシンは自然分布か外来種かが問題となり、まだ決着がついていない。

そのころ、猟師たちは、テンとは異なる毛皮として、ハクビシンを秘かに取引していた。東北地方では「雷獣」と呼ばれ（高島1956 p.503）、宮城県牡鹿半島の大川村（北上町→石巻市）ではヤマネコとかハクモウセンと呼ばれていたという（小原1964 p.239）。

さらに注目すべきことは、猟師たちのなかには、雷獣は戦前の時代から野生していたのに、学者たちが気づかなかつたのだといはるものがいた。また、四国には明治以前からいたと主張する人々さえいたというのである（小原1964 p.243）。小原（1964）は、明治8年（1711）甲州（山梨県）天目山で捕獲されたという『類聚名物考』の雷獣の図をあげ、それがハクビシンに似ていることを指摘している（図1）。

これを読んだとき、私は『震雷記』の明和2年（1765）7月22日に相州（神奈川県）大山（雨峰山）に落ちて捕えられたという雷獣の図（図2）もハクビシンであろうと察したが、さすがに動物学者の梶島（1997 p.594）はそれを見逃さず、資料集にこの文献を取録している。

この二つの図に描かれた雷獣は鼻から額にかけて白斑があり、鼬（『震雷記』）あるいは猪（『類聚名物考』）に似ているとある。梶島はその形状がハクビシンとよく一致していると指摘している。



図1 雷獣の図 『類聚名物考』（小原 1962より）



図2 雷獣の図 『震雷記』（角田 1942より）

また、梶島は『塩尻』に載っている名古屋の真福寺（中区大須観音）で宝永7年（1710）7月に見世物になった木狗<sup>8)</sup>についても、図は稚拙だがハクビシンの特徴をよく表現している、と述べている（図3）。

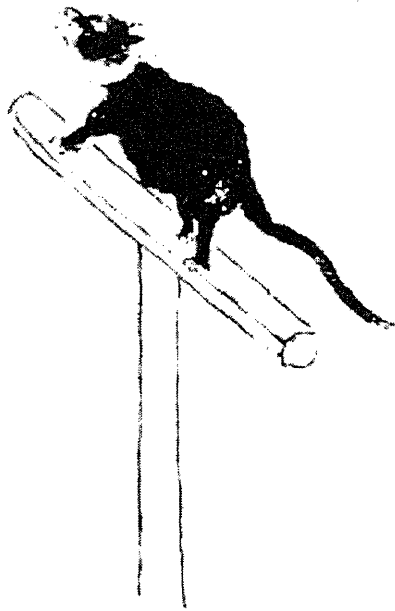


図3 木狗の図 【塩尻】(日本随筆大成より)

この図には顔の正中部に白斑はないが、尾端は白くなっている。ハクビシンの顔の様子は亜種によって様々な変化があり(祖谷・伊東1911 p.97)、ボルネオのハクビシンは鼻筋の白斑がなく、尾の先が白い、と浅間(2005 p.64)は記している。

#### 移入種か在来種か

順序が逆になったが、ハクビシン(白鼻芯、白鼻心)はジャコウネコ科の動物で、白鼻芯(台湾名)の名は鼻筋が白いことに由来する。頭部の様子は亜種によって変化があり、頭部以外には斑点も模様もない。体色も暗褐色から淡褐色まで個体差がある。全体から見ると胴長、短足で尾も長い(図4)。

頭胴長51~76cm、尾長40~60cm、後肢長9~10cm。尾は黒く、ボルネオなど南方のものには、先端が白いものがある(祖谷ら1991 p.96)。肛門近くに分泌線(会陰腺)がよく発達する。

日本以外の分布は、中国東南部(揚子江以南)、海南島、台湾、インド、ネパール、インドシナ、マレー半島、スマトラ、ボルネオ。

雷獣の一部がハクビシンにほぼ間違いないとしても、この動物は江戸時代から国内各地に棲息していただろうか。動物研究者の間には、前にも触れたように、移入個体が野生化したという説と古くから自然に生息していたという説があって、今なお論争が続いている。従って、本稿でも、この問題を避けて通ることはできない。



図4 ハクビシン (大阪市立天王寺動物園 (1992年9月30日))

ハクビシンは東南アジアではペットとして売られており、戦時中南方へ行った人たちがペットとして持ち帰り、それが逃げて繁殖したと推測されていた(小原1962 p.240, 1972 p.139)。ハクビシンが国の狩猟統計に初めて現れたのは昭和27年(1952)であるが、昭和1, 2年(1926,27)ごろ香川県塩江町(高松市)で捕獲されたのが最初の報告のようで(中村1994 p.90)、次いで昭和18年(1943)に静岡県知波田村(湖西市)で捕えられている(小原1972 p.138)。日本でこの獣の棲息が確認された1970年ごろの分布域は、まだ静岡県を中心とする本州中部と四国に限られていた。小原(1972 p.140)はその時点で、ハクビシンが九州から見出されていないことは、自然分布を否定する有力な論拠であると説いている。

ところで、天保4年(1833)にボルネオから舶載された異獣(ランベケンデティル)の図には、鼻の白斑は描かれていないが、磯野・内田(1992 p.77 p.121)は形態や頬と尾の先が白いことから、ハクビシンと推定している。梶島(1997 p.595)も、ジャコウネコは中世以降もしばしば移入されており、その中にハクビシンが含まれている可能性は否定できず、江戸時代に雷獣と呼ばれた獣が脱走、繁殖したことは十分に考えられると述べている。

『塩尻』に記された木狗は移入されたのか、どこかで捕えたものか何も記載がないが、見世物にされるような珍しい動物と見るべきであろう。もしこの動物がハクビシンであれば、鼻に白斑がないので、ボルネオあたりから移入されたか、脱走して捕えられた個体であった可能性も考えられる。

一方、今泉(1960 p.178)は、日本産ハクビシンの頭骨は紅頭峙(台湾)産のそれとは明らかに異なり、大陸産にも似たものが見当たらないと述べている。

猟師たちは雷獣の名のもとに、秘かに毛皮として扱い、特に四国では明治以前からいたと主



張する人もあったという。その後の調査でハクビシンは各地に分布することが確認され、最近では、大阪、鳥取、広島、大分、熊本、長崎、沖縄の7府県を除いて、全国の都道府県に分布することが知られるにいたった(鈴木2005 p.134)。しかし、その分布域は連続せず、まだら模様になっているし、江戸・明治期の確実な報告がないという理由で、今なお外来種と主張する研究者が多い(米田2005 p.90)。

だが、江戸・明治時代の「確実な」証拠はないという動物研究者の立場はわかるが、長年民俗の聞き取り調査を行ってきた一人としては、複数の猟師が「雷獣」の名で取り引きをしていたことは重視していいのではないかと思う。猟師たちは江戸時代の文献から「雷獣」の名を知ったのではなく、おそらくある地方で、遅くとも明治のころから雷獣と呼ばれてきたと考えるのが自然であろう。

最近、磯野(1992)<sup>9)</sup>は江戸の博物家毛利梅園の記録を調査中、天保13年(1842)に周防(山口県)で捕獲された獣の図がハクビシンに他ならないことを認め、これを在来種とする説に有利な資料としている。

#### その他の説

雷獣について書かれた文献は多いが、雷獣とされた動物について学問的に論じたものは、ハクビシン説を除くと、意外に少ない。とくに、ハクビシンの棲息が明らかになる以前に発表された論考は、戦前から日本に棲息する動物であることを前提として論じられている。また、辞典や図鑑などの類は、旧来の説のうち、編著者が妥当と思われるものを選んであるようである。

これらのうち、生物学者の日野(1926)は江戸時代の文献から、イタチ科とリス科の5種、イタチ、テン、アナグマ、リス、ムササビを雷獣と推定している。これらに共通していることは、巧みに木に登り、穴居する性質がある。これらの動物が雷と共に下ったと誤解したのだろうと推測している。「是れ(尾)を撫れば甚だ臭気あり」(『駿国雑誌』)という記録もイタチ科と推定する根拠になっている。

ハクビシンの存在が知られていない時代には、『震雷記』や『類聚名物考』の図をイタチ科の動物と考える研究者が少なくなかった(角田1933 p.1328・1943 p.72)。また『震雷記』『倭訓栞』には、相州大山(雨降山)の雷獣のほか、岩附(埼玉県岩槻市か→さいたま市)に落ちたものは胴短く灰白色であったという。これはリス科と推定する根拠になったようである。

その他、雷に打たれて死んだ獣や、落雷に驚いて叢から走り出した獣を、天から雷と共に降ってきたと勘違いしたことがあったかも知れない。木に登ることのできない獣を雷獣と見誤るのは、このような事例であろう。

荒俣(1988 p.190)は「栗本丹州『動物写生図』より」として、元文2年(1737)に武蔵(埼玉県)岩槻領掛村で雷雨のときに捕えられた、という獣の図を載せている。「尾のきわより耳までの長さ一尺五寸(約45cm)」とある。この図は縮小されているので、細かいところはよくわからないが、荒俣は次の『玄洞放言』からも引用しているので、イタチ科の他にイヌ科の雷獣も

想定しているようである。

『玄洞放言』の図も奇怪な獣としてよく引用される。これは『北越雪譜』の著者として知られている鈴木牧之が模写して、曲亭馬琴に送ったものである。送った方も送られた方も信用していないような、六肢、三尾の異獣で、越後（新潟県）魚沼郡伊勢平治村の深田に落ちて死んだものだという。

「その状六足三尾なり、首は野猪に似て、長き牙あり、喙の長サ七八寸、尾の長サ喙とおなじ、足の長サ六寸余許、爪は水晶の如く、鮮にして水搔あり、狼の如し」という牧之の説明文がある。馬琴はまた「一説に、首尾は獺（かわうそ）に似て、状鼯鼠（もぐら）の如く、尾と共に長サ三尺（約90cm）に過ず、全体雛狐のごとしといへり。種類の一同ならぬものにや」（随筆大成より）と述べている。六足三尾は論外だが、オオカミやキツネに似た動物といえるかも知れない。

もう一つの珍獣は『閑田次筆』の雷獣図である。著者の伴蒿蹊も眞疑のほどはわからないと断ったうえで、僧王屑の『あづまかひ』から転写している。この図には「享和元年（1801）五月十日頃芸州（広島県）九日市里塩竈へ落入死ス雷獣の図大サ曲尺一尺四五寸（約45cm）」と添書きされている。

この絵の原図か、あるいは同じものから模写されたと思われる三図が、湯本（2005 p.52）の著書に記載されている。それらの1枚は『あづまかひ』と同じ説明であるが、他の1枚は「芸州五日市当寅五月一日」、もう1枚は「芸州五日市享和元西五月十三日」となっている。私は広島市に10年近く住んだことがあり、「五日市」（広島市佐伯区）という地名はあるが、「九日市」は安芸でも備後でも聞いたことがない。ともあれ、同じような絵がいくつもあるのは、好事家の関心を集めたとみえる。蒿蹊は「狸に類す」といつているが、私には想像で描かれたものと思えない。

## 雷獣の害と効用

江戸時代には、雷獣は雷と共に落ちて、人や人家などに害を及ぼすと信じられていたが、これはいうまでもなく濡れ衣である。しかし、この時代でも雷獣について疑いを抱いている著者も少なくないが、ここでは取り上げない。

下野（栃木県）烏山<sup>からすやま</sup>辺りでは、春山畑に芋を植えると、雷獣が種芋を掘って食うので、農民はこれを憎んで猟る（『北窓瑣談』）。甲州（山梨県）天目山で捕えた雷獣は蛇虺蟻蛛（へび、けら、がま、くも）を与えると食べるが、米飯で飼うとよく食べるという（『類聚名物考』）。

もしハクビシンが雷獣の一部であるとすれば、雑食性であるから、昆虫、魚貝類、爬虫類、鳥類、小哺乳類などのほか、果物や栽培作物も食べる。日本では、みかん、かき、ぶどう、とうもろこしなどを食べるので嫌われる（祖谷・伊東1991 p.97, 阿部2005 p.90）。駆雷（雷狩）をすると、その翌年は雷鳴が少ない（『執苑日涉』）というのは当時の俗信であろうが、雷害よりも果樹や作物の食害を防ぐことが主な目的ではなかったかと想像する。

捕えた雷獣を食べたという文献は少なくない。下野（『北窓瑣談』）、奥州秋田（『古史伝』『甲子夜話』）、土佐（高知県、『震雷記』）など。雷獣を食べた人は雷を恐れないともいわれる（『扶桑雷除考』）。

雷獣が複数の種類からなるとすると、その味も種によってまちまちになるはずである。

- 1 麻美狸（あなぐま）のような味（『古史伝』）
- 2 雲くさくて味なし（『あづまかひ』）
- 3 味は星鮫のごとく甚だ美なりといえり（『震雷記』）
- 4 その味ひ鱸うなぎの刺身のごとし（『扶桑雷除考』）

これらのなかで気になるのは、『震雷記』の記事である。

2003年中国の一地域で発生した新型肺炎SARS（急性重症呼吸器症候群）が急速に広がり、世界中が大混乱に陥ったことはまだ記憶に新しい。WHOはその病原体を新種のコロナウィルスと断定した。

香港大学の合同調査チームは、SARSのコロナウィルスと遺伝子の配列がきわめてよく似たウィルスが、中国南部のハクビシンやタヌキから検出されたと発表した<sup>10)</sup>。この発表を受けて、食材として飼育されていたハクビシン約1万頭が処分された（2004年1月6日の新聞各紙）。この記事で、ハクビシンが中国南部の中華料理の高級食材であることを初めて知った。

鈴木（2005 p.135）によると、1961年の記録では、福島県いわき市の猟師の間で、ハクビシンの肉はイノシシの肉などとは比較にならないほど美味であったと評判が高かった、とのことである。『震雷記』の雷獣図がハクビシンの特徴を表していることと、その肉が甚だ美味かったということは注目に値する。

捕獲された雷獣のなかには、飼育されたり見世物にされたりしたものもあった。江戸鮫カ橋では鉄網の籠に入れて飼われていた（『類聚名物考』）。大和（奈良県）桜井村（桜井市）で民家の油壺に落ちて死んだものを、大阪道頓堀で木戸銭6銅を取って見世物にした（『摂陽奇観』）。また、名古屋眞福寺で見た木狗は「よく酒をのみ手にして盃を捧げて吸ふ、其行静にして愛すべき獣なりけり」と記されている（『塩尻』）。

戦前、東南アジア各地ではハクビシンをペットとして売っていた。それをマスコットとして飼う船員があり、家で飼育することもあったという（小原1962 p.240・1972 p.139）

## 考察とまとめ

### 1 江戸時代からの民俗知識

これまで述べてきた江戸時代の文献は、それぞれの著者が自分で雷獣を観察した例はむしろ少なく、多くは他者からの聞き取りや地方の伝承を記録したものであろう。

江戸時代の百科事典として知られている『和漢三才図会』（寺島良安編 正徳3年 1713）には、「雷」の項で雷獣について次のように述べている。

其雷ココロ礪こヲシテ奔走シ昇天之便いひヲ覺ム如シ。値一株ノ樹一尋ノ柱ニ則搔上ル黒雲掩下リ、

之二乗外騰ルコトヲ得。其墮ル処必脱毛及爪痕有<sup>ツマアト</sup>、則全体火ニシテ獸之屬爲コト也必ササリ矣[割注 陰中明、陽中暗]。熾火ノ中見得可カラズ、故古今全ク雷ノ本形ヲ見ル者靡シ、疑ラクハ小猫ノ如者乎、爪痕大者ハ燐火ニレハ也。

古謂雷ハ形無シト云者非也、又形有テ六畜ノ如、雌鷄ノ如シト云者並非也、偶々剛毅ノ人雷ヲ捕ル者有、然リ此真ノ雷ニ非也、雷墮ル時禽獸霹靂ニ<sup>オヒカケル</sup>却<sup>イカリウチ</sup>所有、出テ俱ニ墮者偶々之捕者夫レ異品ナレハ則雷ト爲スハ之レラノ類矣、蓋シ和名[割注 伊加豆知]怒擊也。(読み下し。片仮名ルビは原著者)

「小猫ノ如キモノカ」という言葉には実在の小動物を靈獸と見誤ったのではないか、という良安の考えがみてとれる。が、彼にも雷の正体はわからないので、あいまいな内容のままで終わっている。

しかし、江戸時代の本草学者が龍骨を見て龍の実在を疑ったように、雷獸の実在を疑った学者も何人かいただろうが、民間では広く信じられ、明治から昭和の初期まで伝えられてきた(湯本1991 p.13・角田1943 p.73)。

## 2 雷獸の図

雷獸には、けりそり(野州『類聚名物考』)、千年鼪(信濃『信濃奇勝録』)、雷牝(不詳『屠龍工隨筆』)、クロンボウ(木狗)(備中、備前、土佐 『重訂本草綱目啓蒙』)、クロ(奥州同上)、キテン(大和 同上)などの地方名がある。しかし、雷獸が複数の動物であることを、江戸時代の著者たちも知っていた。

それらのうち、ジャコウネコ科のハクビシンが、戦後になって日本に棲息し、雷獸の一つであることが、動物学者によって主張されるようになった(高島1956、小原1962・1972、梶島1997)。ハクビシンは江戸時代にも日本に渡来したことはほぼ間違いないが、在来種とする説も否定されていない。

雷獸の図は、これまで『震雷記』(明和4年,1767)のものが最も古いといわれていたが、もし『塩尻』(享保18年没,1733)の木狗の図がハクビシンであるとする、これが最も古い雷獸図になる。『重訂本草綱目啓蒙』(弘化4年,1848)に、江戸では木狗を雷獸と呼ぶものありといい、『紀伊国統風土記』(天保10年,1839)でも、木狗を俗に雷獸と呼ぶという記述がある(梶島1997 p.594)。

ハクビシンが移入され、それが逃げ出して野生化したとしても、それは江戸時代でもかなり古い時期まで遡る可能性が大きい。ある地方で雷獸の肉が食用にされていたという記録と関連してハクビシンの肉が非常に美味であることは、ハクビシン説に多少とも有利な材料が追加されたことになるだろう。

## 3 「雷獸」の伝来

雷という物理的現象に「雷獸」を取り入れたのは、中国伝来の思想であるが渡来の時期は定

かではない。各地に「雷獣」が広がったのは、おそらく『本草綱目』（李時珍1596）が移入された江戸時代初期（慶長12年,1607）以後であろう。『綱目』には「雷獣」という項目はないが、「木狗」の項があり、木に登っている黒い胴長・長尾の四足獣が描かれている（図5）<sup>11)</sup>。

これにはあまり詳しい説明はないが、「広東，左右江<sup>12)</sup>の山中に生ずる。形は黒狗のやうで能く木に登る」とある。

黒狗の説明はないが、『本草綱目啓蒙』には、木狗を「クロンボウ」とも呼ぶといい、「形ハ<sup>チ</sup>私<sup>チ</sup>森<sup>チ</sup>狗ニ似テ，深黒色，足甚健ニシテ能木ニ上リ，壁ニ上ル。是，木狗ナリ」と説明している。

広東省はハクビシンの分布域の一部でもあり，この獣は木登りも得意である。日本と中国では動物の種類も落雷時の状況も，必しも同じではないので，雷獣の種類が違っていたとしても不思議ではない。今後も『綱目』と雷獣との関係について注意する必要があるだろう。

なお，動物学者の多くは，日本ではハクビシンの分布が分断されて斑状である，という見方を変えていないが，短期間でこれほど増殖したとは不自然であり，繁殖して広がった後に，急速な開発によって森林が分断され，調査が進むにつれて分布域が広がったのではないか，という見方もできる。今後の調査研究を待ちたい。



図5 木狗 『本草綱目』（木村ら 1977より）

## 謝辞

もう20年ぐらいになるかと思うが，伊藤良吉氏からお借りした本に，雷獣の章があり，それを複製したのがきっかけで，雷獣関係の文献を収集してきた。本稿はまだ十分に議論を尽くしていないが，佐野賢治先生に取り上げていただいた。両氏に深く感謝致します。また，安尾秀昭

氏（大阪府）には文献の収集で、三村宜敬氏（神奈川大学大学院）には校正や編集などでお世話になった。深謝の意を表します。

## 注

- 1) 中国の文献には暗いが、井上（1999a, p. 484, 1999b, p. 560）は『国史補』『搜神記』『山海経』『博聞録』、中山（1921, p. 31）は『唐国史補』『五雜俎』『嶺南雜記』、日野（1926, p. 246）はその他に『太平広記』をあげている。
- 2) 『本草綱目』には「雷獸」の項目はないが、「木狗」について述べている。『重訂本草綱目啓蒙』の「木狗」では「江戸ニテ雷獸ト呼モノアリ」と雷獸を木狗の異名としている。小野蘭山『重訂版 本草綱目啓蒙』弘化4年（1848）（東洋文庫552 4, p. 85 平凡社1991）
- 3) 北川信一郎「かみなり 雷」『平凡社版 気象の事典』 p. 160-163 平凡社 1986
- 4) 最近の『理科年表』のデータはこれとは少し違っている。国立天文台編『理科年表』平成17年版 p. 235-236 丸善 2004
- 5) 『笈埃隨筆』では、雷獸の棲息地について「房州二村山といひ、阿波国西南由岐喜来という所とも。按ずるに、安房と云は阿波の誤りしなるべし。房州は小き国にて、左様に雷獸など住べき山なし」という。  
また、名古屋市中村区のように、落雷後の木の裂目を雷獸ではなく、龍の爪痕という所もある（吉岡、本誌20号 p.81,2005）。
- 6) 上記（注5）のように否定する人もいるが、どちらが正しいかは不詳。地名も「二山」となっているが、同じ所と思われる。
- 7) それ以前の日本産哺乳類の概説書や図鑑類にはハクビシンの名はない。  
今泉吉典『分類と生態 日本哺乳動物図説』洋々書房 1949
- 8) 『塩尻』では「雷獸」の名は使っていない。
- 9) 磯野・内田（1992）p. 121より引用。
- 10) 藤田紘一郎『ニッポン「亜熱帯」宣言』（中公新書ラクレ）p. 131-163 中央公論社 2003
- 11) 李時珍（木村康一他校定）『新註校定 国訳本草綱目』新註補増版 12冊 p. 367-368 春陽堂書店 1977
- 12) 木村ら（1977, p. 367）の補注には「左右江は揚子江下流地方」となっているが、広東省には東江と西江が流れ、合流して珠江となり、南シナ海に注いでいる。

## 雷獸に関する文献

- 1 明治以降の、日本人研究者による雷獸関係の文献を収録した。著者、監修者または編者のアルファベット順に配列した。
- 2 \*印はハクビシンに関する文献のうち、直接雷獸に言及していないものである。

3 気象学・動物学関係の報告や論文は十分に検索することができなかった。漏れた文献は他日追加したい。

- \* 阿部 永 (監修) 『日本の哺乳類』 129頁 (米田正明 ハクビシン) 東海大学出版会 1994
- \* —— 『日本産哺乳類頭骨図説』 252-253頁 北海道大学図書刊行会 2005
- \* —— (監修) 『日本の哺乳類』 改訂版90頁 (米田正明 ハクビシン) 東海大学出版会 2005
- \* 阿部勇治 「鈴鹿山麓のけものと人びと」 『滋賀の獣たち』 (高橋春成編) 13-45頁 サンライズ出版 2003
- 荒俣 宏 『世界大博物図鑑』 5 哺乳類 190-191頁 (雷獣) 平凡社1988
- 『怪物の友 モンスター博物館』 (集英社文庫) 69-70頁 (雷獣) 集英社 1994
- \* 朝目 稔 『日本の哺乳類』 (玉川選書) 171-172頁 玉川大学出版 1977
- \* 浅間 茂 『フィールドガイド ボルネオ野生動物』 (ブルーバックス) 62,64頁 講談社 2005
- 島山久尚 『雷の科学』 河出書房新社 1970 (「雷の文化史」 『自然読本 気象』 97-104頁) 河出書房新社 1980
- \* 林 寿郎 『標準原色図鑑全集』 20動物Ⅱ 50頁 保育社 1968 (『エコロン自然シリーズ』 動物Ⅱ 50頁 保育社 1995)
- 日野 巖 『動物妖怪譚』 240-248頁 養賢堂 1926 (復刻 有明書房 1975)
- \* 今泉忠明 『アニマルトラック・ハンドブック』 48-49頁 自由国民社 1994
- \* —— 『野外動物観察事典』 234-235頁 東京堂出版 2004
- \* 今泉吉典 『原色日本哺乳動物図鑑』 177-178頁 保育社 1960
- \* —— (監修) 『学研生物図鑑 動物』 296 (増井光子) 学習研究社 1991 (初版1983)
- 井上円了 『妖怪学講義』 哲学館 1893 (『井上円了・妖怪学全集』 1巻 484-486頁 柏書房 1999 a)
- 『天狗論』 哲学館 1903 (『井上円了・妖怪学全集』 4巻 560-561頁 柏書房 1999 b)
- 磯野直秀 「ハクビシンの古図」 『慶応義塾大学日吉紀要 自然科学』 11号 113-115 1992
- 「江戸時代に捕ったハクビシン」 『動物と動物園』 1992年4月号 頁不詳
- 磯野直秀・内田康夫 (解説) 『舶来鳥獣図誌』 (博物図譜ライブラリー 5) 76-77,121頁 八坂書房 1992
- 梶島孝雄 『資料 日本動物史』 565,566,594-595頁 八坂書房 1997
- 角田厚生 「雷除け雑考」 『旅と伝説』 6年10号 (70号) 1326-1337頁 1933
- 「人間界に降りた雷物語」 『科学画報』 32巻8号 71-74頁 1943
- \* 子安和弘 『フィールドガイド 足跡図鑑』 58-59, 116頁 日経サイエンス社 1993
- \* 黒田長礼ほか (編) 『原色動物大図鑑』 I 20頁 (黒田長礼 はくびしん) 北隆館 1957
- \* 増井光子 『日本の動物』 (自然観察シリーズ10 哺乳類) 80-82頁 小学館 1976

- \*—————1991→今泉吉典1991  
松本信広「雷の故事と俗信」『平凡社版 気象の事典』（浅井富雄ほか監修）163-165頁 平凡社 1986  
水木しげる（画）村上健司（編著）『日本妖怪大事典』353頁（雷獣）角川書店 2005  
南方熊楠「紀州俗伝」『郷土研究』3巻5号 1914（『南方熊楠全集』2巻 360-361頁 平凡社 1971）
- \*中村一恵『スズメもモンシロチョウも外国からやって来た—帰化動物と日本の自然』 121-131頁（ハクビシン）PHP研究所 1990
- \*————『帰化動物のはなし』（はなしシリーズ）90-96頁 技報堂出版 1994  
中山太郎「雷神研究」『郷土趣味』3巻3号 107-150頁 1921  
小原秀雄「雷獣考」『二十世紀の新発見<現代の記録 動物の世界1>』（浦本昌紀・小原秀雄・小森厚共著）233-253頁 紀伊国屋書店 1964  
————「日本野生動物記12 ハクビシンほか」『自然』25巻10号 108-123頁 1970  
————『続 日本野生動物記』（自然選書）131-152頁 中央公論社1972  
岡田章雄『日本史小百科14 動物』 266-268頁（雷獣）近藤出版社 1979  
笠間良彦『図説日本未確認生物事典』 146-148頁（雷獣）柏美術出版社 1994
- \*祖谷勝紀・伊東員義「ジャコウネコ科の分類」『世界の動物 分類と飼育』2 食肉目（今泉吉典監修）78-118頁（ハクビシン496-497頁）東京動物園協会 1991
- \*鈴木欣司「外来どうぶつミニ図鑑3 ハクビシン」『日経サイエンス』35巻1号 48-50頁 2005a
- \*————『日本外来哺乳類フィールド図鑑』 134-147頁 旺文社 2005b  
田口龍雄『風祭』（雷14-28頁）古今書院 1941  
高島春雄「ライジウ 雷獣」『動物の事典』（岡田要監修）503頁 東京堂出版 1956
- \*徳田御稔『大東亜の動物』哺乳類 南方篇 212-213頁 精華房 1944
- \*鳥居春己「ハクビシン」『日本動物大百科』2 哺乳類Ⅱ（日高敏隆監修）136-137頁 平凡社 1996
- \*角田義治『自然の怪異』126-128頁 創樹社 1990
- \*上野益三『日本動物学史』469-470頁 八坂書房 1987  
柳田国男「山の神のチンコロ」『郷土研究』2巻6号 1914（『妖怪談義』修道社 1956, 『定本柳田国男集』4巻 筑摩書房 1963, 『柳田国男全集』6巻 155-158頁 ちくま文庫 1989, 『柳田国男全集』20巻 353-355頁 筑摩書房 1999）
- \*米田政明1994→阿部永1994
- \*————2005→阿部永2005  
湯本 豪（編）『明治妖怪新聞』50-56頁 柏書房 1991  
————『日本幻獣図説』 50-56頁 河出書房新社 2005